



円仁求法巡礼路程略図

3、天台山を目指して 最後の遣唐使として唐に留学するが、もともと請益僧（入唐僧（唐への留学僧）のうち、短期間のもの）であったため目指す天台山へは旅行許可が下りず（短期の入唐僧の為日程的に無理と判断されたか）、空しく帰国せねばならない事態に陥った。唐への留住を唐皇帝に何度も願い出るが認められない。そこで円仁は遣唐使一行と離れて危険をおかして不法在唐を決意する（外国人僧の滞在には唐皇帝の勅許が必要）。天台山に居た最澄の姿を童子（子供）の時に見ていたという若い天台僧敬文が、天台山からはるばる円仁を訪ねてきた。日本から高僧が揚州に来ているという情報を得て、懐かしく思って訪れて来たのだという。唐滞在中の円仁の世話を何かと見てくれるようになる。海州東海県で遣唐大使一行から離れ、一夜を過ごすも村人達に不審な僧だと警戒され（中国語通じず、「自分は新羅僧だ」と主張しているが新羅の言葉でもない様だ、怪しい僧だ）、役所に突き出されてしまう。再び遣唐大使一行のところに連れ戻されてしまった（『行記』839年（開成4年）4月10日条）。

